

# 大学生の多重役割に対する認識の変容プロセス —M-GTA による授業効果の分析—

Considering on Changes in Perception and Attitude toward  
Multiple Role among University Students  
— Analysis of teaching effectiveness by M-GTA —

小山 知子 (KOYAMA, Tomoko) ・ 杉本 英晴 (SUGIMOTO, Hideharu)

## I 問題と目的

現在の日本では、急速な少子高齢化、共働き世帯数の増加という社会的背景に加え、長引くコロナ禍により労働者の勤務形態、生活様式が多様化している。1995年までは専業主婦世帯が共働き世帯を上回っていたが、2020年には専業主婦世帯571万世帯に対し、共働き世帯は約3倍の1,240万世帯となっている(総務省統計局, 2020)。2007年には、「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」が策定され、男女問わず、仕事の能力を向上させながら、家事、育児との両立を図る時代に入っている。

夫婦共働きが増え、ワーク・ライフ・バランスの実現を目指す中で問題点として、武石(2016)は、仕事上の役割と家庭など仕事以外の生活上の役割が両立しない場合、役割遂行に関してネガティブな感情が生じ、それがストレスにつながると述べている。働く母親について、土肥・広沢・田中(1990)は、独身有職女性や専業主婦に比べ、役割数が多くなることから、多忙で疲労を感じる反面、生活満足度は独身有職女性や専業主婦よりも高いと指摘している。濱田(2005)は、親役割葛藤による子供への罪悪感、職業役割葛藤による職場への罪悪感というネガティブな感情が喚起される反面、子どもの発達、成長により生活への張りを感じるなどのポジティブな意識をもたらすことを確認している。また、佐藤・松浦(2019)は、電機連合が組合員・管理職を対象としたアンケート調査を分析し、企業外での交流機会(PTA・子ども会、ボランティア活動、勉強会

や異業種交流会など)が働く人々の「知的好奇心」「学習習慣」「チャレンジ力」の3つの特性を備えた「変化対応行動」につながることを実証し、社員自身が担う複数の役割のバランスをうまく取ることにより、ストレスが低い状態になり、仕事にも集中できるようになると示唆している。これらの研究結果から、多様な複数の役割(以下、多重役割)を担うことは、負担感や時間的な制約が高まり役割葛藤をもたらす一方で生活全般の満足度を高める傾向を持っているといえる。

大学におけるキャリア教育についても、家庭、地域活動など生活領域での役割を考えた支援が求められるという指摘がなされてきた(河崎, 2011; 富田・金井, 2012; 丸山, 2016など)。富田・金井(2012)は、現状の社会が抱える問題として仕事と家庭の両立の困難さだけに着目するのではなく、両役割を担うことによる肯定的側面に関してもフィードバックしていくことが、社会に出ていく大学生にプラスの影響を与えると述べている。太田(2011)は、大学生がアルバイト、趣味という複数の役割を有し、それらにエネルギーを投入するほど、心理的幸福感(well-being)が高まることを明らかにしている。

しかし、教育課程内でのキャリア教育の取り組み内容を見ると、「勤労観・職業観の育成を目的とした授業科目の開設」87.4%、「資格取得・就職対策等を目的とした授業科目の開設」85.1%と就職準備を意識したワーク・キャリアの視点を重視した科目が多くなっている。一方、ライフ・キャリアとの関連を取り上げた「女性の多様なキャリアを意識し

たもの等, 男女共同参画の視点を踏まえたキャリア教育」は37.2%, 「労働者としての権利・義務等, 労働法制上の知識の獲得・修得を目的とした授業科目の開設」は49.9%と半数以下である(文部科学省, 2020)。ライフ・キャリアに関する授業の教育効果について, 長田・藪田(2014)は結婚・出産と仕事, 多様な働き方, 金銭・金融教育に関する授業を受講した女子学生は, 働くことへの固定的, 限定的な考えが軽減され, 自分がどのようなスタイルで働きたいか, 働けるかを考えるようになったと述べている。丸山(2016)は, 丸山・河崎(2016)が作成したライフ・キャリア教育の授業プログラムを実践し, 他者とのつながりなどを大切にする「人間関係」, 今後の仕事や人生についての展望を持つ「キャリア統合」において有意に能力が向上したことを確認している。また, 大野・目良(2020)は, キャリアインタビュー, 理想の人生年表の作成, 労働法や経済的自立の観点から具体的な家計費の計算などを取り入れた授業の実践により, 女性のライフ・キャリアの多様性・柔軟性への理解やライフ・キャリアを具体的に考える思考の深まったと述べている。しかし, いずれも女子学生を対象とした授業である。

また, 目標とする人物やモデルとなる社会人を見つけ, キャリアデザインを描けるようになることを目的とした「キャリアインタビュー」「キャリアモデル・ケーススタディ」が, キャリア教育の手法の一つとして実践されている(平尾, 2005; 坂本, 2013; 勝又, 2017; 高松, 2022)。モデルとなる社会人に仕事内容, 現在のキャリアへのルート, 学生へのメッセージをインタビューし, 印象に残ったこと, 気づいたことについてレポートにまとめるというものである。授業効果として, 共感できる働き方の発見(平尾, 2005), キャリア観の醸成, 修羅場を乗り越える強さと人とのつながりを形成しようとする意識の向上(勝又, 2017), 働くことへの関心の向上(高松, 2022)が確認されている。しかし, モデルとなる社会人に対し, 多重役割に関する質問項目は含まれておらず, 多重役割に関する教育効果の測定は行われていないと考えられる。小山・杉本(2021)は, ライフ・キャリアの視点を重視し

た授業を行い, 年齢と増減する役割への理解が深まり, 卒業後のキャリア形成のイメージが持てるようになったこと, 家庭経済, 給与に注目し, 就職活動, 就職後の生活を充実させたいという意識を高めていたことを明らかにしている。この点からも仕事, 家庭, 地域活動における多重役割を肯定的に受け止められるようなライフ・キャリアの教育, 支援の拡充が必須だと考えられるが, 多重役割に対する認識の変容プロセスを検討した研究は見られない。

そこで本研究では, どのような授業内容が多重役割に対する認識を高めることにつながるのか, また, 多重役割に対する認識の高まりがどのようにキャリア意識に影響を与えるかに着目する。受講生へのインタビュー調査からその変容プロセスを明らかにすることを目的とする。

## II 方法

### 1. 授業内容

関東圏内のA大学では, キャリア教育科目を担当する専任教員が, ライフ・キャリアに主眼を置いた授業を行っている。授業の教育目標は, 「卒業後から30歳くらいまでに視野を拡大し, 自身の各ライフステージで仕事, 家庭, 趣味, 地域活動などを統合して考えることができるようになること, そのうえで, 今後の大学生活をどのように過ごしていくか, 具体的に考え, 行動に移せるようになること」である。授業は全15回であり, 2020年度および2021年度についてはすべてオンラインで行われた。うち, 13回はオンデマンド, 2回はリアルタイム形式のグループワークを中心とした授業を実施した。

授業は, 内容別にa過去の自分を振り返り, 自身の成長や価値観の変化に気づく(以下, 過去の自分を振り返る), b短時間勤務制度やリモート通勤など多様な働き方の紹介(以下, 多様な働き方), c社会人のキャリアストーリー(以下, キャリアストーリー), d卒業後の生活にかかる費用や給与明細の見方などの金融教育(以下, 家庭経済・ライフイメージの明確化)の4つに分類された。なお, 第1回, 7回, 8回は, bとcを組み合わせた授業を実施した。

大学生の多重役割に対する認識の変容プロセス  
—M-GTAによる授業効果の分析—

表1「ライフプランニング」授業内容

分類	回	授業テーマ	内容
b/c	1	キャリアとライフプランニング	VUCAの時代に私たちは自分の力でどうすることもできない疫病に直面している。コロナ禍を理由に内定取り消しに遭い、就職活動を再開ののち、新入社員として働き始めた男性について取り上げた新聞記事を紹介。生き方、働き方を柔軟に捉える大切さを理解する。
a	2	自己概念	日々の経験を通じて、人は絶えず変化しているが「自分は一人だ」という認識は変わりにくい。時々自分を客観的に見つめ、どのような人なのか、捉え直すことが必要である「ジョハリの窓」のワークを行い、他者から見た自分について聞き、自身を客観視することで、自分の良さ、可能性に気づく。
	3	自分を振り返る① ライフラインチャートの作成	これまでの嬉しかったこと、落ち込んだ出来事を振り返り、その時々々の気持ちやモチベーションを1本の線で結ぶ。どんなに気持ちが落ち込むことがあってもいつかは上昇すること、落ち込んだときにどのようにしたら自分の気持ちが上向くのか、理解する。そうすることで不測の事態に備えることができるという気づきにつなげる。
	4	自分を振り返る② 不合理な信念（論理療法）	大学生は自分らしさの形成期であり、「自分はダメな人間だ」と思い込んでいることがある。ある男子学生の例を紹介したうえで、現在抱えている就職活動、授業、将来への不快な感情、思いを書き出し、それらに反駁、反論しながら「不合理な信念」を修正していく。合理的な信念に変え、行動に移す意識を持てるようにする。
	5	現在の自分と過去とのつながりを考える※	3～4名のグループワーク。過去から現在までの質問が並んだすごろく盤を使い、順番に答えていく。過去に打ち込んだこと、現在一歩踏み出せずにいることなどを話し、相互に質問、話を展開させる。最後に一人ずつ、「こんな人だと感じた」という印象を伝え合い、最終的にコロナ禍での大学生活の過ごし方を見直すことにつなげる。
	6	ライフプランニングと働き方① 働き方に対する思い込み	私たちの多くは、子どものころなりたいたと考えていた職業希望が制約を受けながら育っているという「職業認知のプロセス」を理解する。自分は性別、職業威信にこだわり、可能性を狭めていないか、検討する。それにより、自分の志望や可能性をできるだけ、大きく広げ、進路を選択する大切さに気づけるようにする。
b/c	7	ライフプランニングと働き方② 進路選択に対する思い込み	ゲーム会社勤務の30代男性のキャリアストーリーを取り上げる。中学時代からゲームを作る仕事に就きたいと考え、大学と専門学校との両立、ゲーム製作につながる趣味の探求から現在を紹介。自分のやりたいことを具体化したうえで情報収集や学びの方法を検討し、具体的な行動につなげていく。主客の不一致がないか確認する。
	8	ライフプランニングと働き方③ 働く現場の現状と課題	三種の神器、失われた20年、非正規雇用増加など労働の歴史をふまえ、働き方改革の一つ「柔軟な働き方ができる環境づくり」に取り組む企業の例と育児休暇、短時間勤務制度を活用している40代女性のキャリアストーリーを紹介。社会人がどのように制度を活用し、仕事、家庭、趣味などを多重役割を担っているかを知る。
c	9	キャリアストーリー① ライフ・キャリア・レインボー	勤務先の業績悪化により、外資系企業に吸収され、転職活動もしたが、家庭、地域とのつながりや考え、就業継続を選択した50代男性のキャリアストーリーを紹介。仕事は、家庭、地域など生活領域と密接に関わっているという理解を深める。男性の人生をライフ・キャリア・レインボーに表し、多様な役割を担っていることを認識する。
	10	キャリアストーリー② 計画された偶発性、弱い紐帯	結婚後大阪転勤になり、家庭との両立を考慮して退職した授業担当教員のキャリアストーリーを紹介。近所の知人の勧めで英語教室を主宰、併せて前職と関連するシンクタンクの人脈から大学講師をするようになった経緯を詳細に説明。弱い紐帯、計画された偶発性を取り入れることで自身の可能性が広がっていくことに気づく。
	11	キャリアストーリー③ シュロスバーグの4つのS	3年後離職率、リアリティショックについて説明し、多くの人から話を聞くことで入社前の会社・適性理解を高めていくことの大切さを説明。実際に3年で離職し、再就職した男性にどのようにして退職、再就職への準備、行動をしたかというインタビュー（録画）を通じ、シュロスバーグの4Sシステムおよび転機の乗り越え方を学ぶ。
d	12	現在の自分とこれからの自分を考える※	3～4名のグループワーク。将来への思いについての質問が並んだすごろく盤を使い、順番に答えていく。現在そして今後の大学生活の過ごし方、就職に向けた準備について、相互に質問、アドバイス、話を展開させる。最終的に今後に向けた具体的な行動や目標を明確化する。
	13	ライフプランニング① 起こりうるライフイベントを知る	ライフプランの実現には、家庭経済（お金）、生きがい（心）、健康づくり（体）のバランスが欠かせない。社会人になってからの生活と家庭経済について理解を深める。1年目、一人暮らしの男性の給与、勤務、残業時間、休日の過ごし方を紹介し、給与明細の見方、社会保障、納税額についての確認テストを行い、知識の定着を図る。
	14	ライフプランニング② 家庭経済	「仕事」「家庭」「趣味・余暇」「学習・地域活動」の領域において、今後10年間で実現してみたいこと、実現できたら、自身の幸せにつながると思うことを書きだす。そして、それらの実現に必要な費用を算出する。自分が就きたい業界、職業の年収も調べ、収支のバランスはどうか、検討し、家庭経済面での将来を展望する。
	15	ライフプランニング③ ライフイメージの明確化	これまでの授業全体を振り返り、「仕事」「家庭」「趣味・余暇」「学習・資格取得」「地域・社会での活動」において30歳の時に、どのような自分になりたいか、そのために今、そして今後の大学生活でどのようなことに取り組んでいこうと考えているか、具体化し、その内容をレポート提出してもらおう。

a 過去の自分を振り返る b 多様な働き方 c キャリアストーリー d 家庭経済・ライフイメージの明確化 ※はリアルタイム形式のグループワーク

授業内容の詳細については表1に表す。

## 2. 調査対象者と分析方法

### (1) 調査対象者

調査対象者は、2020年、2021年秋学期に関東圏内のA大学で「ライフプランニング」の授業を履修している大学生のうち、調査協力に同意が得られた17名（男性8名、女性9名）とした。

性別、学年の内訳対象者を表2に示す。

### (2) 調査時期と手続き

調査は、2021年2月上旬から2022年2月上旬にかけて、オンラインで個別の半構造化面接を行っ

た。尋ねた内容は、「授業の前後で新たに身についたと思う知識、能力はどのようなものでしたか」「将来に対する考えや行動に影響を与えたと思う授業は、どのような内容でしたか」「この授業を受けて、以前より考えるようになったり、行動するようになったことはありますか」であった。面接時間は一人約40分であり、事前に許可を得たうえで内容をPC上に録音し、後日逐語録を作成した。学生への倫理的配慮として、調査への協力は、自由意志によること、途中で調査を中止、中断しても不利益を被らないことを説明した。本研究は駿河台大学の研究倫理審査にて承認を得た（承認番号：02 駿研倫第

表2 調査対象者の学年・性別の内訳

協力者	学年	性別
A	2	男性
B	2	男性
C	2	男性
D	2	男性
E	2	男性
F	2	男性
G	2	男性
H	2	男性
I	2	女性
J	2	女性
K	2	女性
L	2	女性
M	2	女性
N	2	女性
O	2	女性
P	2	女性
Q	3	女性

1 - 4号, 03 駿研倫第1 - 1号)。

### (3) 分析方法と妥当性信頼性の確保

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下, M-GTA)を用いた。M-GTAは研究結果を実践の場面に戻し, 応用されることが検証にもなるため, データをより還元できる分析方法とされる。また, 研究対象自体がプロセス的特性を持っている場面に適しているとされる(木下, 2003)。以上から, 授業を通じ, 大学生の多重役割に対する変容プロセスを検討するという本研究に最適であると判断し, M-GTAを用いて分析を行った。なお, 分析は筆者ら2名で行われた。

## III 結果

調査対象者へのインタビュー調査を分析した結果, 多重役割に対する認識の変化およびキャリア意識・行動に影響を与えた授業内容として多様な働き方の紹介, キャリアストーリー, 家庭経済・ライフイメージの明確化の3つが選択された。多重役割に対する認識の変化については, 4 カテゴリー,

10 概念, キャリア意識と行動の変化は, 2 カテゴリー, 5 概念が確認された(表3)。概念生成時には, 分析ワークシートを作成し, 概念名, 定義, 具体例などを記入した。分析ワークシートの例を表4に示す。

以下, 結果をカテゴリーごとに示し, 変容プロセスと合わせた形で記述する。なお, カテゴリーを<>, 分析で得られた概念を【】で示し, 具体例を斜体, 具体例において当該概念ともっとも関連する部分に下線, 授業内容に関する部分に波線を引いた。分析の結果, どのような授業内容が多重役割に対する認識の変化につながるのか, また, 多重役割に対する認識の高まりがどのようにキャリア意識と行動に影響を与えるかを表した図が変容プロセス結果図(図1)である。

### (1) カテゴリーごとの分析結果

#### a) キャリア構築に対する発見

<キャリア構築に対する発見>カテゴリーとは, 趣味, 人とのつながりがキャリア形成に影響を及ぼすことがある, 将来結婚し, 家庭を持つことによって, 仕事や働き方を変えていく必要が出てくるかもしれないというキャリア構築に対する新たな気づきである。下位概念として【転職, 就業中断に対する肯定的な理解】(概念1), 【自分のワーク・ライフ・バランスを考える必要があることへの理解】(概念2), 【就職までのプロセスは多様であることへの理解】(概念3)の3つが見出された。

【転職・就業中断に対する肯定的な理解】(概念1)について, 以下に具体例を示す。

M: なおみさんのキャリアストーリーで, 1年間海外に行くために退職して, その後派遣社員として再就職して, 結婚後も子育てしながら, 総合職に職種転換したり, 大学院に行ったりしているというのを聞いて…。私が希望している公認心理師は, 子育ての時はお休みして少し経ってからまた始めることもできるので, どういう働き方をしていくかを考えるようになりました。

P: 育児をしながら働きたいなという考えを持っていたんですけど, 先生のキャリアストーリーを聞

大学生の多重役割に対する認識の変容プロセス  
—M-GTA による授業効果の分析—

表3 M-GTA により生成されたカテゴリ、概念一覧

カテゴリグループ	カテゴリ	No.	概念名	定義	該当者	人数	
多重役割に対する認識の変化	キャリア構築に対する発見	1	転職・就業中断に関する肯定的な理解	ライフイベントに合わせて柔軟にキャリアを変えていくことができるという発見	C.D.E.G.I.J.M.N.P.Q	10	
		2	自分のワーク・ライフ・バランスを考える必要があることへの理解	結婚、育児もする可能性を検討しながら、現実に向き合っていくことが大事だという気持ちの高まり	A.B.C.J.L.M.N.Q	8	
		3	就職までのプロセスは多様であることへの理解	人的ネットワーク、趣味、特技が仕事につながる可能性を有しているという発見	D.E.F.K.L.O.P.Q	8	
	キャリア形成に対する考え方の広がり	4	親のキャリアに影響を受けていることへの気づき	親の影響を受けながらも自分に合った生き方、働き方を大事にしていけばよいという気づき	A.B.C.E.I.J.K.L.N.Q	9	
		5	キャリアは一本道ではないことへの気づき	いったん就職したら仕事を変えることは容易でないという思い込みへの気づき	C.D.E.F.G.H.I.J.K.L.M.N.O.P.Q	15	
	多重役割への理解	6	親・地域社会との関係性への理解	子どもの役割をふまえてライフ・キャリアを考えていく必要があるとの気づき	C.D.E.O.Q	5	
		7	多重役割とキャリア形成の関係性への理解	卒業後には仕事以外に多重役割を担う可能性があるという気づき	A.B.C.D.F.F.G.H.I.J.K.L.M.N.O.P.Q	17	
		8	ワーク・ライフ・バランスへの注目	自分自身のことと仕事のことばかりを考えていたという認知の高まり	C.E.F.I.J.K.L.M.O.Q	10	
	多重役割を担うイメージの形成	9	ライフイメージの明確化	仕事と家庭、趣味などの役割のバランスをどのように取るか、明確にしようとする気持ちの高まり	A.B.C.D.E.F.G.H.I.J.K.L.M.N.O.P.Q	17	
		10	家庭経済とお金を考慮したライフ・キャリアの検討	今後の生活にはそれなりのお金がかかるということへの認知の高まり	A.B.C.D.G.H.J.L.M.N.O.P.Q	13	
	キャリア意識と行動の変化	必要な情報、知識の獲得に対する意識の高まり	11	多様な働き方、労働環境への意識の向上	生活スタイルの変化に対応可能な職業、企業を検討することへの意識の向上	A.E.J.K.M.Q	6
			12	進路決定前しておくことへの意識の向上	人に聞く、情報収集することが重要であるとの意識の向上	B.C.D.F.G.H.I.J.K.L.M.N.O.P	14
			13	他者への関心の高まり	他者がどのようなことに取り組んでいるか知り、刺激を受けて行動しようという意識の向上	C.E.F.J.K.L.M.N.O.P	10
		今後の生活とキャリアの充実に向けた行動の高まり	14	充実した大学生活、卒業後の生活の実現に向けた行動の高まり	自分の得意分野の能力を伸ばし、今後の生活の充実を図ろうとする行動の高まり	B.C.D.F.G.J.K.M.O.P.Q	11
			15	資格取得に向けた行動の高まり	資格取得に向けた学習とキャリアの可能性を広げる意識、行動の高まり	B.C.D.E.G.I.K.M.O.P.Q	11

N=17

表4 分析ワークシートの例

カテゴリグループ	多重役割に対する認識の変化
カテゴリ	キャリア形成に対する考え方の広がり
No./ 概念名	⑤キャリアは一本道ではないことへの気づき
定義	いったん就職したら仕事を変えることは容易でないという思い込みへの気づき
<p>【ヴァリエーション】</p> <p>先生のキャリアストーリーの話聞いた時に、最初は一本だけの道だったのが、どんどん開けていく感じがして…。更に他の人のキャリアストーリーや違う仕事についている人の話の展開を聞いた時に、「こういう道の開き方があるんだ、こういう考え方もあるんだ…」って思いました。そこで、じゃあ、自分は果たしてこういう岐路に立たされた時にどんな考えを起こすだろう…。そして、その選択によってどういう道が開けるのかっていうことを想像できるようになって…。いろんな人のキャリアストーリーを聞いて、「自分だったらどうするだろう?」と考えることができたんです。「これだけだ」と思ってきた道が自分にもどんどん開けるような気がしたんですね。(C)</p>	

まあ身に染みしたのは多くの方のキャリアストーリーの中で教えてくれた社会に出てからの働き方や働く現場の現状についてです。人生を過ごすうちにいろいろと状況が変わるけれど、その時々でこれが自分に合う仕事、働き方なのか、考えていけばいいのだと理解できました。授業を受ける前は、企業を選択して…。し終わったら就職して、もう一直線に働いて生きていかなければならないと思っていました。転職を選択すると、結構デメリットが大きいかなと…。(D)

家業を継ぐだけでなく、やっぱり今、コロナの影響とかもあるんで、そうですね、他の職に就くことも考えないといけないなって思いましたね。そう思ったのも、キャリアストーリーで一つの仕事だけでなく、他の仕事に就いた話を聞いたことがきっかけです。やっぱり選択肢は2つ、3つあった方が将来としては有利なんだなって思いましたね。(E)

授業を受ける前は「キャリアは一筋」みたいなのがイメージとしてこびりついていたかなと思いますね。今考えると就職してから仕事を変えると、そういう考え方もあるなってすごく思いますけど…。授業を全部受け終わってからも考えさせられる授業であったなと思いました。あまりこういう授業ってないんで。(F)

一つの会社の一つの職種だけではなく、いろいろな方面に、多角的に仕事を見た方が良いと気づきました。就職した先で一生働き続ける必要はないと思いました。これに関してはいろいろと意見が分かれると思います。が、人生は一度きりなのでその場その場でやりたいことを大切に今後、進路選択していきたいと思います。(G)

やっぱり自分が思っている、思っていたものとは違う方向になってしまうこともあるけど、その中で自分が出来ることを精一杯探して生きていくことも大切なので、自分のなりたいものだけ見るんじゃなくて他の場合とかも考えていく必要があるのかなって思いました。退職後、子育てをしながら英語を教えていたという先生の事例を聞いて、一度キャリアを手放しても違う方向にも道が開けるんだなってすごく思いました。いろいろな職業に就いた人の話をもっと聞きたかったです。(H)

ライフプランを変えることはすごく難しいことだと思っていたんですけど…。キャリアストーリーを聞いていくうちに、自分の能力を高めたいから、キャリアを変更したい、家庭を持って育児をするために育休を取り、その間に何かをして違うことをするか、一本だけでなく、柔軟なライフプランができるんだな、改めてほかのキャリアに移動し、予定を立てることもできるんだなと思いました。(I)

ラグビーの福岡選手が引退して医師の道に進む準備をしているというのを授業で知った時、今から？って思ったんです。でも遠回りというか一本の道から行かなくても他の事をやってからという選択の仕方もあるんだなっていうのは新しい発見でした。私、諸突猛進みたいな感じなので、一本の道を行きたくなる人なのでちょっと外れた道を行ったりするのもいいなと思いました。(J)

先生自身のキャリアストーリーを聞いてこれから大学を卒業して就職したら、その仕事先でこれからずっと仕事をして行く訳ではないんだなっていうのを知ることができて、「仕事も変えられる。変えていいんだ」って感じましたね。これまで就職自体をすごく重くとらえていたんですけど、少し視野を広げて、今やりたいことをやってみようって考えることができました。(K)

犯罪心理学を勉強して専門職に就きたいと思って、大学院まで進ませてもらって…という道のりだけを考えていたんです。授業を通じて自分がこうしたいっていうのを持つのも大事だけど、それ以外の選択肢も自分

大学生の多重役割に対する認識の変容プロセス  
—M-GTA による授業効果の分析—

にはあるっていうのを忘れてはいけないんだなって思うことができたんですね。こだわりというか意志がある分、視野が狭くなっていると気づきました。(L)

公認心理師になるという目標を立てて、その目標に対して例えば4年間の大学を経て大学院に進学して資格試験を受けてなるというところまでは自分の中でプランがあったんですけども、その先というのは今まで考えたことがなかったんですね。この授業を受講して、公認心理士になった後、結婚とか子育ての時期には非常勤として働くとか、ほかの道を検討してもいいんだなと思いました。(M)

人によっていろいろなキャリアパスがあると知れたことはとても助けになり、影響を受けました。先生が退職されて違う仕事に就いたというキャリアのストーリーとおみさんの育児の休職のお話を聞いて、新卒で入った会社で働き続けられないといけないと思いついていた自分の考えを変えてくれる、こういう選択肢もあるよということをわからせてくれたことが印象的でした。一回仕事を決めたらずっとやり続けられないといけない、転職、退職をして次を見つけるのは難しいのかなと思っていました。(N)

1つの職に就いたら、ずっとそこで働くという考えがありました。キャリアストーリーで転職した人の話などを聞いて、人によっていろんなキャリアパスのとり方があることを知りました。自分の周りでは1人も転職した人がいなくて、そこが情報不足というか、「転職って難しいんじゃないか」「一つの仕事をずっとやっていくのが楽なのかな」と思っていました。(O)

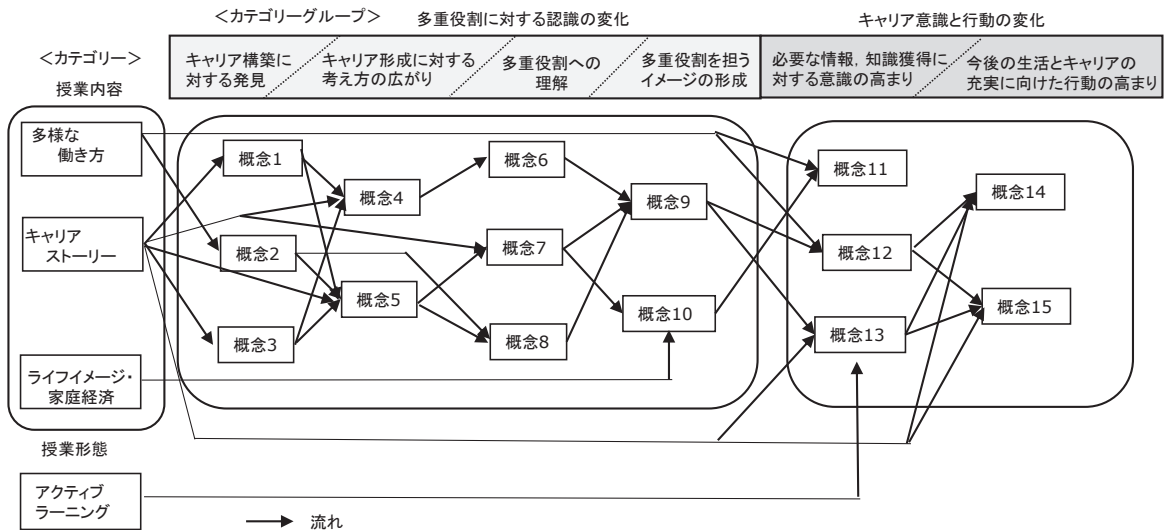
そのイメージとしてやっぱ1つの企業をずっと続けていくのがいいのかなというふうにちょっと今まで思っていたので、そういうわけじゃないという考えに変わりました。育児の時には1回会社というか、就いている仕事を辞めて、育児に専念して、またそこで出会った人たちに助けを借りながら自分のやってみたいと思う仕事にまた就くというやり方もあるんだな…と思うようになりました。(P)

自分は一回就職したらそこに満足しちゃうじゃないですけど、その中でどうにかしようとするタイプなんです。退職する、転職するっていう考えがなかったんですよ。キャリアストーリーを聞いて職業を変えられるっていうのがすごいなって思ったのと、「変えてもいいんだ」みたいな、「変えるのもありだな」って思うようになった。(Q)

【理論的メモ】

受講前は、一度就職したら仕事を変えることは容易でないだろうと考えていた。授業の中でも特にキャリアストーリーからさまざまな働き方の実例を聞き、社会人は自身の生活に合った仕事に変えたり、労働時間を増減させるなど、柔軟にキャリアを形成していると理解した。キャリアは一本道ではなく、ライフイベントや個人の価値観の変化などに応じて変わることもあると気づいている。

図1 変容プロセス結果図



いて、育児の時に就いていた仕事を辞めてもその後、出会った人たちの助けを借りながら自分のやってみたいと思う仕事にまた就くというやり方もあるんだな、そういう選択もいいなというふうにちょっと考えが変わりました。

これらの例は、退職と育児は自身の可能性を制限するのではないかと考えていたが、いったん仕事から離れたとしても再び「労働者」としての役割を担うこともできる、という気づきが語られているため、【転職・就業中断に対する肯定的な理解】（概念1）とした。調査対象者の発話データから、この【転職、就業中断に対する肯定的な理解】（概念1）は、授業で取り上げたキャリアストーリーの中でもとりわけ「育児休暇制度を活用しながら就業継続している女性のキャリアストーリー」「企業をいったん退職した後、再就業した女性のキャリアストーリー」の側面が影響していることが示唆された。

続いて【自分のワーク・ライフ・バランスを考える必要があることへの理解】（概念2）である。

A：第8回の授業で、在宅勤務、夫も育休9割が希望という現状から、今の社会はこういう希望が多いんだと知って、そこからググっと、結婚、育休が自分に近くなってきて、自分は将来どうなり

たいんだろう？って考えるようになりましたね。

C：授業で子育てとか夫が育休というワードが出てきて、自分も社会人になって結婚したいという願望がでて、子育てにかかわるのではないかというIFの仮定がどんどん出来上がって…。結婚、家庭を持つことに対して、途切れ途切れで繋がっていなかったすぐろくの盤面の1ピースが埋まった感じがしましたね。

これらの例は、結婚、家庭を持ち、生活領域での役割が増えることを自分事として肯定的に受け止め、考えてみようとする気持ちが高まったことが語られているため、【自分のワーク・ライフ・バランスを考える必要があることへの理解】（概念2）とした。調査対象者の発話データから、この【自分のワーク・ライフ・バランスを考える必要があることへの理解】（概念2）は、授業で取り上げた多様な働き方の中でもとりわけ「働く現場の現状と課題」の側面が影響していることが示された。

次は【就職までのプロセスは多様であることへの理解】（概念3）についてである。

P：印象的だったのは、弱い紐帯の強さ…。キャリアストーリーの中で、子供の友だち関係というかママ友から「このまま小学生を対象とした英語教



室をつくってみたらどう？場所は貸すよ」と言ってもらったことから英語の仕事につながったと知って、人とのつながりから仕事を得ることもあるんだなと感じましたね。人との関わりって大切だなって改めて感じました。

B：第1回授業で、コロナの影響で映像会社の内定が取り消しになってしまい、父親が「ここ募集しているよ」って教えてくれたお寺に就職したという話。お寺の仕事は多岐にわたっていて、将来的にはデザイン関係の仕事も手がけられるかもしれないということでしたよね。自分が求めるやりがいばかりを優先させるのではなく、お寺での仕事と自分のしたいことを融合させていこうという努力がすごいなって思いました。

これらの例は、「弱い紐帯の強さ」に加えて、特技があれば、仕事を得ることにつながることもある、という発見について語られているため、【就職までのプロセスは多様であることへの理解】（概念3）とした。調査対象者の発話データから、この【就職までのプロセスは多様であることへの理解】（概念3）は、第1回授業の「キャリアとライフプランニング」、キャリアストーリーの中でもとりわけ「計画された偶発性」「弱い紐帯の強さ」の側面が影響していることが示唆された。

#### b) キャリア形成に対する考え方の広がりカテゴリ

<キャリア形成に対する考え方の広がり>カテゴリは、親が歩んだキャリアは自分のキャリア形成に通じるものがあるのではないかと、という思いといったん就職したら、転職することは容易ではないというキャリア形成に対する固定観念を持っていた、という気づきである。下位概念として【親のキャリアに影響を受けていることへの気づき】（概念4）、【キャリアは一本道ではないことへの気づき】（概念5）の2つが見出された。

以下に【親のキャリアに影響を受けていることへの気づき】（概念4）について具体例を示す。

K：両親は学校を出てから入った金融関係の会社でずっと続けているんです。仕事っていうのはす

ごく重たいイメージで、私も両親の様にこれから就く仕事をずっと続けるのかしらと思っていました。キャリアストーリーを聞いて、少し視野を広げて、今やりたいことをやってみようという風に考えることができました。

この例は、両親が一つの会社で就業継続していることから、特に疑問を感じることなく同じ姿を自分と重ねていた、と気づいたことが語られている。次のような例もあった。

I：母が転職をするのがかなり大変そうで…。一度決めた仕事はできるだけ長く続けることを前提にした方がいいのかなって思っていました。でもキャリアストーリーを聞いてそうでもないってことがわかりました。

この例は、母親の再就職がうまくいかない様子が印象に残り、自身の働き方に加え、生き方にも影響を与えていたことに対する気づきが語られているため、【親のキャリアに影響を受けていることへの気づき】（概念4）とした。調査対象者の発話データから、この【親のキャリアに影響を受けていることへの気づき】（概念4）は、【転職、就業中断に対する肯定的な理解】（概念1）と【就職までのプロセスは多様であることへの理解】（概念3）の2つ概念とキャリアストーリーの中でもとりわけ「計画された偶発性」「ライフ・キャリア・レインボー」の側面が影響していることが示唆された。

次は【キャリアは一本道ではないことへの気づき】（概念5）についてである。

I：ライフプランを変えることはすごく難しいことだと思っていたんですけど…。キャリアストーリーを聞いていくうちに、自分の能力を高めたいからキャリアを変更したい、家庭を持って育児をするために育休を取り、その間に何かをして違うことをするとか、一本だけでなく、柔軟なライフプランができるんだな、改めてほかのキャリアに移動し、予定を立てることもできるんだなと思いました。

D：まあ身に染みたのは多くの方のキャリアストーリーの中で教えてくれた社会に出てから働き方や働く現場の現状についてです。人生を過ごすうち

にいろいろと状況が変わるけど、その時々でこれが自分に合う仕事、働き方なのか、考えていけばいいのだと理解できました。授業を受ける前は、企業を選択して…。し終わったら就職して、もう一直線に働いて生きていかなければならないと思っていました。転職を選択すると、結構デメリットが大きいかなと…。

これらの例は、自身の環境や役割の増減に伴い、仕事と働き方を変えながら現在に至っている社会人の具体例を多様な働き方およびキャリアストーリーの授業で知ったこと、いったん仕事を決めたら容易に変えることはできないとの思い込みに気づいたことが語られているため、【キャリアは一本道ではないことへの認識】(概念5)とした。調査対象者の発話データから、この【キャリアは一本道ではないことへの認識】(概念5)は、【転職、就業中断に対する肯定的な理解】(概念1)、【自分のワーク・ライフ・バランスを考える必要があることへの理解】(概念2)、【就職までのプロセスは多様であることへの理解】(概念3)の3つの概念とキャリアストーリーの中でもとりわけ「計画された偶発性」「ライフ・キャリア・レインボー」の側面が影響していることが示唆された。

### c) 多重役割への理解

<多重役割への理解>カテゴリーは、【親・地域社会との関係性への理解】(概念6)、【多重役割とキャリア構築の関係性への理解】(概念7)、【ワーク・ライフ・バランスへの注目】(概念8)の3つの概念が含まれる。大学卒業後は、仕事を中心とした生活を送ることになるが、仕事以外の生活領域には予想していなかった多様な役割があることを理解したということである。【親・地域社会との関係性への理解】(概念6)について例を2つ示す。

E: 実家は代々から続いている店で、親ももう50代なので、途中で途絶えてはいけななとも思ってた…。ちょっと試行錯誤しながら考えているところなんですよ。

Q: 自分が就職で地元に戻らないとチームにキーパーがいなくなっちゃうんですよ。弟もまだ地元

にいるので、弟、親の立場もあるし、お世話になった監督さんや協会の方々にも恩返ししたいなど。自分の好き勝手に就職先を選ぶだけでなく、地元のことも考えないとなって。

これらの例は、親が地域社会との関連を大事にしながら生計を立てていることへの理解が進み、自身も地域社会との関連を考えて進路を検討していると語っていることから【親・地域社会との関係性への理解】(概念6)とした。調査対象者の発話データから、この【親・地域社会との関係性への理解】(概念6)は、【親のキャリアに影響を受けていることへの気づき】(概念4)の概念の側面が影響していることが示された。

次は【多重役割とキャリア形成の関係性への理解】(概念7)についてである。

B: ライフ・キャリア・レインボーの授業で、学生としての今しか見ていなかったなと思いました。大学卒業したら会社に入るだけとしか考えていなかったんです。父親の役割っていうことをシンゴさんのキャリアストーリーで詳しく見て「ああ、なるほどなあ」って思った感じです。

H: (キャリアストーリーの) シンゴさんは自分のなりたい仕事があって、そのために情報系の大学に入っている。行動力があって凄と思ったのと配偶者、家庭、親などの役割を自分自身で理解しつつ、仕事をこなしているのが自分は違うと思った。自分も早く就職、仕事を決めて、これから担ういろんな役割に沿っていこうと思った。

これらの例は、第7回で取り上げた男性のキャリアをライフ・キャリア・レインボーに表すワークから、キャリアは仕事を中心としながらも親、家庭などの多重役割と密接に関連し、形成されていくという気づきが語られていることから【多重役割とキャリア形成の関係性への理解】(概念7)とした。この【多重役割とキャリア形成の関係性への理解】(概念7)は、【キャリアは一本道ではないことへの認識】(概念5)の概念とキャリアストーリーの中でもとりわけ「ライフ・キャリア・レインボー」の側面が影響していることが示唆された。

次に【ワーク・ライフ・バランスへの注目】(概念8)

について下記に具体例を示す。

M：以前は特に結婚願望もなく、同じ会社に長く勤めて、生活費は自分で稼ぐといった考えでいました。自分の幸せを考えていなかったと気づきました。ライフを考えることで、どう働いていこうとか、仕事ばかり考えていたときより気持ちが軽くなりました。

Q：仕事だけを考えていたところがあって、家庭と仕事を両立するとか何歳くらいに子供ほしいとか全然考えたことなかったなと思って。仕事だけを考えるのではなく、役割のバランスを考えなきゃいけないというのが授業を受けて分かりました。

これらの例では、仕事に重きを置き、多重役割の視点を持っていなかったことに気づき、今後のライフ・キャリアを検討していきたいという認識から、【ワーク・ライフ・バランスへの注目】(概念8)とした。調査対象者の発話データから、この【ワーク・ライフ・バランスへの注目】(概念8)は、【自分のワーク・ライフ・バランスを考える必要があることへの理解】(概念2)と【キャリアは一本道ではないことへの認識】(概念5)の概念の側面が影響していることが示された。

#### d) 多重役割を担うイメージの形成

<多重役割を担うイメージの形成>カテゴリーとは、今後、多重役割を担う可能性があるという認識、親や地域との関連から担うのが望ましい役割への認識が高まり、それらをどのように担うのかを検討しようとする気持ちである。下位概念として【ライフイメージの明確化】(概念9)、【家庭経済とお金を考慮したライフ・キャリアの検討】(概念10)の2つが見出された。

第1に【ライフイメージの明確化】(概念9)について、以下に具体例を示す。

B：大学を卒業したら会社に入るだけだと考えてきて、仕事以外に何がしたいかもっと明確にしていた方がいいと考えるようになった。父親と役割があるという考えも生まれた。この授業を受けていなかったら、給料やお金だけ見て就職先を決めていたかもしれません…結婚する、子供ができ

るといったライフプランニングや老後のことは全く考えていなかったんじゃないかなって思います。

M：公認心理師になるという目標を立てて、4年間の大学を経て大学院に進学して資格試験を受けて…というところまでは自分の中でプランがあったんですけど、その先というのは考えたことがなかったんですね。この授業を受講して、仕事のプランだけでなく、結婚、子育てとか、引越してひとり暮らしするのかなどのライフの部分も考えるようになりました。

O：人によっていろんなキャリアパスがあると知って、せっかく好きなことや興味のあることがたくさんあるのならば、大学のうちに勉強して資格を取るなりして、それらを伸ばしていきたいと思いました。社会人になってから、増える役割やなくなっていく役割とかが少し明確になったので、「それによって自分がこの役割が増えるから、こういうことしていかないといけないかな」というビジョンがはっきりしました。

これらは、社会人になってから生活領域における役割がどのように増えていくのかが以前より想像できるようになり、仕事とのバランスをどのように取るとよいか、考えていこうとする気持ちの高まりから【ライフイメージの明確化】(概念9)とした。調査対象者の発話データから、この【ライフイメージの明確化】(概念9)は、【親・地域社会との関係性への理解】(概念6)、【多重役割とキャリア構築の関係性への理解】(概念7)、【ワーク・ライフ・バランスへの注目】(概念8)の3つの概念の側面と関連していることが示唆された。

次に【家庭経済とお金を考慮したライフ・キャリアの検討】(概念10)について具体例を示す。

O：第14回の授業で、趣味としてやりたいことがたくさん出てきて…。全て自由にやるにはお金がたくさんかかるということが分かったので、「やりたい」だけでなく、「どれくらい稼いでどれくらい貯めて」と考えて、計画しないといけないと思いました。

L：奨学金を借りているので、この先金銭的に不安

な面もあるなっていうのもお金に関する授業でまた新たに分かりました。希望している仕事はある程度の収入を得るには40歳近くになってしまう可能性が高いので…。他の道を検討した方がよいのかもって…。

これらの例は、今後の生活にかかる趣味や奨学金の返済など現実的な費用を算出したことにより、仕事以外の生活領域についても検討する必要があるという認識から、【家庭経済とお金を考慮したライフ・キャリアの検討】(概念10)とした。そして、収入を得て自由に使える金額と支出のバランスを考えて進路選択する必要があるとの認識を高めていた。調査対象者の発話データから、この【家庭経済とお金を考慮したライフ・キャリアの検討】(概念10)は、授業で取り上げた家庭経済・ライフイメージの明確化の中でもとりわけ「家庭経済」と【多重役割とキャリア構築の関係性への理解】(概念7)の概念の側面が影響していることが示唆された。

## B) キャリア意識と行動の変化

必要な情報、知識の獲得に対する意識の高まり

<必要な情報、知識の獲得に対する意識の高まり>カテゴリーは、今後の進路を選択するにあたって、誰からどのような情報を得ると選択肢が広がるのか、どのような集団に所属し、学習をすると希望するキャリアに近づくのかということを考えるようになり、意識的に行動に移している状態である。下位概念として【多様な働き方、労働環境への意識の向上】(概念11)、【進路決定前にしておくことへの意識の向上】(概念12)、【他者への関心の高まり】(概念13)の3つの概念が見出された。

【多様な働き方、労働環境への意識の向上】(概念11)について具体例を示す。

J：リモート転勤、ふるさとワーク制度なども初めて聞いたので、会社の実態も自分で見なきゃいけないなって思いました。テレビでも取り上げられても聞き流していたりとかしてたと思う。自分には関係ない、会社のことか…って流していた。

Q：仕事しながら子供も欲しい…ってなるかもしれないので、就職活動するときに有給休暇のシステ

ムと社会保障、平均年収はどのくらいなのかまで見るようになりました。

これらの例は、多重役割を担うことをふまえ、自分にあった働き方、労働環境であるかをしっかり検討しようとする意識の高まりが語られていることから、【多様な働き方、労働環境への意識の向上】(概念11)とした。調査対象者の発話データから、この【多様な働き方、労働環境への意識の向上】(概念11)は、授業の中で取り上げた多様な働き方の中でもとりわけ「働く現場の現状と課題」と【家庭経済とお金を考慮したライフ・キャリアの検討】(概念10)との概念の側面が影響していることが示された。

次に【進路決定前にしておくことへの意識の向上】(概念12)についてである。

M：公認心理士は女性が多く、子育てのときはお休みして少し経ってからまた始めることもできて、自分の考えるライフプランで動ける仕事なんじゃないかと思ってまして、どう働いているのかなと興味を持つようになり、プレゼминаールの先生に詳しく実情を聞きました。どう働いているのかなと興味を持つようになってきました。

N：今まではあと2年もあるからという感じで余裕があったんですけど、就職のことやその先のことを授業で考えていくうちに早めに行動しようと思いました。公務員試験を受けた方にどう勉強したのか、対策をしたのかななどのアドバイスをいただきました。

これらの例は、進路を決める前に就職試験や働く現場の実情については働いている本人から直接聞くことが必要だと考え、意識的に行動している具体例を語っていることから、【進路決定前にしておくことへの意識の向上】(概念12)とした。調査対象者の発話データから、この【進路決定前にしておくことへの意識の向上】(概念12)は、授業の中で取り上げた多様な働き方の中でもとりわけ「働く現場の現状と課題」と【ライフイメージの明確化】(概念9)の概念の側面が影響していることが示された。

次は【他者への関心の高まり】(概念13)についてである。

F：リアルタイム授業でグループの人と話すっていうのはすごい有意義で、すごい刺激になったなと思います。「この人はこういう就職先を考えているんだな」という話を聞いて、いい刺激になってライバルとして高め合うみたいな感じで…。

O：リアルタイム授業で他の子たちの話を聞いて「今何をやっている?」「何を勉強している?」っていう話を聞いて、やりたいことに向かって勉強したり、資格を取ったりしていると知って刺激を受けました。自分も少し強みがあったら良いなど思ったので、勉強してみようかなと思うようになりました。

これらの例は、他の受講生がどのようなライフイメージを持っているか、その実現に向けてどのようなことに取り組んでいるかを知り、関心を持ったことについて語られていることから、【他者への関心の高まり】(概念13)とした。発話データからこの【他者への関心の高まり】(概念13)は、授業の中で取り上げたキャリアストーリーの中でもとりわけ「弱い紐帯の強さ」と【ライフイメージの明確化】(概念9)の概念の側面が影響していることが示唆された。また2回にわたるリアルタイム授業でのグループワーク(アクティブラーニング)により、他者との会話が意識と行動に影を及ぼしていたことが確認された。

今後の生活とキャリアの充実に向けた行動の高まり

<今後の生活とキャリアの充実に向けた行動の高まり>カテゴリーとは、就職活動、大学院への進学などの進路、現段階で思い描いている20代半ば以降のキャリアや生活の実現に向けて、どのような準備をすればよいかを考え、行動に移している状態である。下位概念として、【充実した大学生活、卒業後の生活の実現に向けた行動の高まり】(概念14)と【資格取得に向けた行動の高まり】(概念15)の2つが見出された。下記は【充実した大学生活、卒業後の生活の実現に向けた行動の高まり】(概念14)についてである。

M：私、英語系のサークルを作りました。春学期に3人くらい集まればサークルができるからやって

みれば?という軽い感じでお話をもらったんですけど、そんな大それたことは荷が重くなって思ってた。授業で弱い紐帯の強さについて学んで、確かにそうだなと思って、友だちに声をかけてみたら5人くらい集まったので、立ち上げることができました。

Q：人とのつながりから仕事を得ることもあるとわかって、将来的に職人さんみたいなこともやってみたいんですよ。紙工作が得意なので、仕事をやりながらYouTubeで作っているところを出してもいいなって。親にも「今は無理かもしれないけれど、後々できたらいいな」と思っているんだよね」ってことは話せるようになった。

これらの例は、他者の理解と協力を得ながら自分の得意分野の能力を伸ばし、今後の大学生活と将来の生活の充実を図ろうとする気持ちの高まりと行動について語られていることから、【充実した大学生活、卒業後の生活の実現に向けた行動の高まり】(概念14)とした。調査対象者の発話データから、この【充実した大学生活、卒業後の生活の実現に向けた行動の高まり】(概念14)は、授業で取り上げたキャリアストーリーの中でもとりわけ「弱い紐帯の強さ」と【進路決定前にしておくことへの意識の向上】(概念12)と【他者への関心の高まり】(概念13)2つの概念の側面が影響していることが示された。

次に【資格取得に向けた行動の高まり】(概念15)についてである。

G：昨年9月時点では資格といっても何を取ればいいのか分からなかったのですが、他の人のアドバイスをたくさん取り入れ自分でも調べて、日商簿記3級に合格することができました。考えるだけではなく自分で行動を起こすことによっていろいろ変われると思えました。

Q：先生の体験談を聞いてやりたいことをするには準備が必要、学習を積んで資格を取れば、人とのつながりの中でできるようになることがあるとわかりました。資格を取った方がいいと思ってTOEIC受けたんです。受けてみようと思ったのが今回初めてでした。

この例は、他者の体験談、アドバイスを聴き、資格を取得しようと考えて情報収集し、行動したことについて語られていることから、【資格取得に向けた行動の高まり】(概念15)とした。発話データから、この【資格取得に向けた行動の高まり】(概念15)は、授業の中で取り上げたキャリアストーリーの中でもとりわけ「弱い紐帯の強さ」と「計画された偶発性」と【進路決定前にしておくことへの意識の向上】(概念12)【他者への関心の高まり】(概念13)の2つの概念の側面が影響していることが示唆された。

#### IV 考察

本研究では、ライフ・キャリアに主眼を置いた授業を受けることにより、大学生の多重役割に対する認識がどのように変化していくかというプロセスを分析した。得られた結果をもとに、どのような授業内容が多重役割に対する認識に影響したのか、多重役割に対する認識の高まりがキャリア意識にどのような影響を与えたのかを考察し、最後に今後の課題について述べる。

##### 1. 授業内容が多重役割に対する認識におよぼす影響

###### (1) キャリアストーリー

社会人のキャリアストーリーに関する授業は、自身がこれまで知り得なかったキャリア構築の側面の発見につながっていたことが見出された。育児、出産により、いったん仕事から離れたとしても、再び「労働者」としての役割を担うことは可能であるとの理解(概念1)、人的ネットワークによりもたらされる情報が就職、再就業につながることもあるとの理解(概念3)につながっていた。そして親の働き方、生き方に影響を受け、特に疑問を感じることなく同じ姿を自分と重ねていたことへの気づきが見いだされた(概念4)。また、社会人になったら、就職した会社で就業継続するだけでなく、仕事と生活のバランスを取るために柔軟に職業、働き方を変え、キャリアを構築することも可能であるとの理解(概念5)、30代、50代の男性の役割をスーパー(D.E.Super)の理論的アプローチであるライフ・

キャリア・レインボー(Super, 1980)に表し、視覚的に捉えることで、「労働者」以外の多重役割を担う可能性があることへの理解(概念7)へと導かれた。これらのことから、調査対象者は受講前、先行研究同様に大学卒業後のキャリアは仕事を中心であると認識していたこと(尾崎:2001, 都築2007)、多様な就職イメージを有しておらず、就職することによって自分の将来の可能性が制限されると捉えていたこと(杉本, 2012)が見出された。しかしながら、キャリアストーリーの授業によって、大学卒業後は仕事だけでなく、家庭など仕事以外の生活上の役割と密接に関わり合いながらキャリア形成されるとの理解が進み、受講前と比較して多様な就職イメージが持てるようになったと考えられる。また、田澤(2010)によれば、大学生は、自分の父親、母親が仕事を重視していたと認知していると、相対的に自分も仕事を重視した生活をしたと捉えており、父親と母親の両者の生き方が子ども(大学生)に影響していると述べている。本研究においても概念4で、親の働き方、生き方に影響を受けていたことが確認された。キャリアストーリーの授業により、両親とは異なる働き方、生き方の事例を知り、仕事と生活のバランスを取りながらキャリアを構築することが可能であるとの認識を高めていた。以上のことから、大学生に対し、社会人がどのように多重役割を担いながら仕事上の役割を果たし、キャリア構築しているかという多様な事例を伝えることの意義が見出された。そして、キャリアストーリーの授業は、大学生の多重役割に対する認識を高め、多様な就職イメージを持つことにつながることを示唆された。

###### (2) 多様な働き方と家庭経済

多様な働き方に関する授業では、社会人が仕事上の責任を果たしながら、時間的制約の中でどのように家事、育児、趣味などのバランスを取っているかを知り、家庭を持つことを自分事として考えてみようという意識を高めていた(概念2)。その結果、多重役割を担うことを前向きに捉え、希望する企業や業界が自分にあった働き方、労働環境であるかを

検討しようとする意識の向上（概念11）へとつながっていた。このことから、社会に出る前に多重役割への認識を高めておくことで、役割葛藤の低減につながる可能性があると考えられる。

また家庭経済に関する授業は、収入を得て自由に使える金額と支出のバランスを考えて進路選択する必要があるとの認識の向上に影響をおよぼしていた（概念10）。その結果、現在希望している仕事に就いた場合に得られる収入、奨学金の返済や自身のやりたいことの実現にかかる費用とのバランスを取るために、進路を多様に検討しようとする意識の向上につながっていた（概念11）。長田・藪田（2014）、大野・目良（2020）は女子大学において、多様な働き方に関する授業と具体的な家計費の計算を取り入れた授業効果として、ライフ・キャリアを具体的に考える意識が向上したことを明らかにしている。本研究においても多様な働き方と家庭経済に関する授業により、経済的に自立すること、収支のバランスを取りながら働くことに対する認識を高めたと考えられる。加えて、具体的に勤務形態、休暇制度にも目を向け、働いている人に職場の現状を聞くといった行動を起こす重要性に気づいていた。多重役割を担うイメージが持てるようになったことにより、どのように働いていくかを早めに考え、行動しようとする意識が高まったと考えられる。

## 2. 多重役割への認識がキャリア意識・行動におよぼす影響

多重役割への認識により、関心のある企業、職業の年収、勤務形態、休暇制度について調べることへの意識が高まったことが確認された（概念11）。そして、進路選択にあたって自分自身の可能性を広げるために興味、関心の幅を広げ、働く現場の実情について知ることが重要であると認識し、働いている本人から直接情報を得るといった行動を起こしていた（概念12）。また2回にわたるリアルタイム授業でのグループワーク（アクティブラーニング）では、進路選択について他者がどのような希望を持ち、その実現に向けた準備や資格取得を進めているかという情報を得たことにより、他者への関心への高まり

が見られた（概念13）。杉本（2019）は、グループワークを行うことによって、他者との比較の中で自分がどのような役割や価値観を重視しているのかを考えるに至り、自分が将来重視したい役割や価値観の明確化が促されると述べている。本研究においてもグループワークにより、他者から刺激を受け、自分が今後実現したいことに対する意欲が高まったことが確認された。

また行動の変化においては、学内団体の立ち上げや得意分野を発展させるための行動（概念14）、資格取得（概念15）につながっていたことが見出された。「弱い紐帯の強さ」の理論では、家族や親友、親しい知人などの強いつながりよりも、あまり知らない人、会う機会の少ない疎遠な知人といった弱いつながりから進路意思決定に関する情報を得ていることが明らかになっている（Granovetter,1973,1995）。キャリアストーリーの授業で「弱い紐帯の強さ」に対する理解が促され、サークルの新設、資格取得に向けた行動を起こしていたことが確認された。

以上のことから、多重役割に対する認識が高まるにつれ、自身のキャリア形成に必要な情報、知識の獲得への関心にもポジティブに影響し、結果としてキャリア意識と行動の高まりを促していたことが見出された。

これまでの先行研究（平尾，2005：坂本，201：勝又，2017：高松，2022）においても「キャリアインタビュー」「キャリアモデル・ケーススタディ」を用いた授業の授業効果が確認されている。いずれも職業や働き方に関して目標とする人物として認識されるなど、働くことへの関心の高まりが見られたとしている。しかし、モデルには、両親、親戚などの身近な人物か、プロ・スポーツ選手などの社会的有名人が選ばれることが多く、視野が広がらない、単なるあこがれに終わるという指摘（坂本，2014）、学生は将来同じような職業に就く可能性の低いモデルを取り上げる傾向にあるという課題（坂本，2013）が挙げられている。「キャリアモデル」「キャリアモデル・ケーススタディ」の授業を行うにあたり、多重役割に関する質問を含めると、モデ

ルとなる人物が抱く役割葛藤と担っている役割に対する思いを知ることになるのではないだろうか。例えば、社会的有名人の場合、どのように生活上の役割のバランスを取りながら「労働者」としての役割を果たしているのか、そこにはどのような役割葛藤や幸福感があるのかを知ることができるだろう。これにより、自分がモデルと同じような職業に就いた場合、仕事と家庭、地域活動など生活領域での役割をどのように担うことになるのかというイメージが持てるようになって考えられる。その結果、多重役割に対する認識が高まるとともに自分が担いたい複数の役割とのバランスを取ることでできる職業を具体的に考え、進路を多様に検討するための進路探索行動が促されるのではないかと考えられる。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究では M-GTA により、大学生の多重役割に対する変容プロセスに関する仮説モデルを得ることができた。しかしこれはあくまで 17 名の仮説生成であるというサンプリングの限界を考慮する必要がある。今後も複数のフィールドにおいて同様の仮説が生成できるのか、新たな概念やカテゴリー、別のプロセスが形成されることはないか検証し、本研究の仮説を修正・発展させる必要がある。また本研究は、授業を受講前後の自身の変化および影響を与えた授業内容について語ってもらうという形を取っている。そのため、インタビューに答えられるということは、授業内容に対して少なからず教育効果を実感し、多重役割の重要性を認識できている人であったと考えられる。よって、本研究で得られた仮説モデルは、限定的なものである可能性を否定することはできない。

したがって、今後は、多重役割に注目した質問紙調査を実施し、受講後に多重役割に対する認識が変化しない学生に対してもインタビュー調査する必要がある。さらにキャリアアダプタビリティ、進路探索行動などの尺度を用いて、授業の教育効果と併せ、多重役割の認識がもたらす影響を分析していくことを課題としたい。

### 引用文献

- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫「多重な役割従事に関する研究—役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果—」『社会心理学研究』第 5 巻第 2 号、1990 年、137-145 頁。
- Granovetter, M. The strength of weak ties, *American Journal of Sociology*, 78 (6), (1973), pp.1360-1380.
- Granovetter, M. Getting a job: A study of contacts and careers. Chicago, IL: University of Chicago Press, (1995)
- 濱田維子「仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響」『日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report』3, 2005 年、147-158 頁。
- 平尾元彦「キャリア教育の手法としてのキャリアモデル」, 山口大学教育機構『大学教育』第 2 号、2005 年、95-104 頁。
- 勝又あずさ「「ダイナミックプロセス型キャリア」のケーススタディによるキャリア観の醸成」菅原良ほか編著『キャリア形成支援の方法論と実践』, 東北大学出版会、2017 年、197-214 頁。
- 河崎智恵「ライフキャリア教育における能力領域の構造化とカリキュラムモデルの作成」『キャリア教育研究』Vol.29, 2011 年、57-69 頁。
- 木下康仁『グラウンデッドセオリーアプローチの実践—質的研究への誘い』, 弘文社、2003 年。
- 小山知子・杉本英晴「ライフ・キャリアの視点を重視した授業が大学生のキャリア意識・行動に及ぼす影響—ワーク・キャリアの視点を重視した授業との比較検証—」駿河台大学教育研究第 3 号、2020 年、48-62 頁。
- 丸山実子「高等学校・大学におけるライフキャリア教育の実践」『奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」』第 8 号、2016 年、67-75 頁。
- 丸山実子・河崎智恵「ライフキャリア教育における授業プログラムの枠組 構築—日米家庭科教科書分析を手がかりとして—」『奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」』第 8 号、2016 年、



- 59-66 頁。  
文部科学省「平成 30 年度大学における教育内容の改革状況について（概要）」2020 年。  
[https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt\\_daigakuc03-000010276\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf)  
(最終確認日：2022 年 2 月 27 日)
- 大野祥子・目良秋子「女子大学におけるキャリア教育の在り方とその教育効果に関する検討 2：本学初等教育学科学生のキャリア意識の推移とテキスト分析」『生涯発達心理学研究』2020. 第 12 号, 2020 年, 79-90 頁。
- 太田さつき「多重役割が心理的 well-being に及ぼす影響についての検討：大学生を対象として」『紀要 / 青山学院大学文学部』第 43 号, 2001 年, 163-175 頁。
- 長田尚子・藪田由己子「女性のライフプランニングを志向した授業実践—共通教育科目「女性とキャリア」の開発と評価—」『現代女性とキャリア』第 6 号, 2014 年, 89-101 頁。
- 尾崎仁美「大学生の将来の見通しと適応との関連」溝上慎一編『大学生の自己と生き方』, ナカニシヤ出版, 2001 年, 167-198 頁。
- 坂本麗香「キャリアモデルの探索と形成にむけて—女子大学におけるキャリアモデルレポートの実践から—」『名古屋女子大学紀要』59 (人・社), 2013 年, 87-97 頁。
- 坂本理郎「キャリアモデル」日本キャリアデザイン学会監修『キャリアデザイン支援ハンドブック』, ナカニシヤ出版, 2014 年, 33 頁。
- 佐藤博樹・松浦民恵「「変化対応行動」と仕事・仕事以外の自己管理—ライフキャリアのマネジメント—」『キャリアデザイン研究』Vol.15, 2019 年, 31-44 頁。
- 総務省統計局「労働力調査特別調査」総務省統計局「労働力調査（詳細集計）」, 2020 年。  
<https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0212.html>  
(最終確認日 2022 年 2 月 17 日)
- 杉本英晴「大学生の就職に対するイメージの構造」『キャリア研究』第 31 巻 第 1 号, 2012 年, 15-24 頁。
- 杉本英晴「キャリア教育課程の新設およびキャリア教育科目の開発・実施とその効果 中部大学全学共通教育科目「社会人基礎知識」を事例として」永作稔・三保紀裕編『大学におけるキャリア教育とは何か』, ナカニシヤ出版, 2019 年, 33-67 頁。
- Super, D.E. A life-span, life-space approach to career development, *Journal of Vocational Behavior*, 16 (3), (1980), pp.282-298.
- 高松直紀「遠隔によるキャリア教育の一手法としてのキャリアインタビュー—テキストマイニングによる教育効果の検証—」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第 12 巻, 2022 年, 143-154 頁。
- 武石恵美子『キャリア開発論』, 2016 年, 中央経済社。
- 田澤実「大学生のライフ・キャリア・パースペクティブと親の生き方の認知」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』7, 2010 年, 143-156 頁。
- 富田真紀子・金井篤子「大学生が展望するワーク・ファミリー・バランス—ワーク・ファミリー・コンフリクト / ファシリテーション予期について男女別の観点から—」『産業・組織心理学研究』第 26 巻第 1 号, 2012 年, 35-52 頁。
- 都築学『大学生の進路選択と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討—』, 2007 年, ナカニシヤ出版。

